

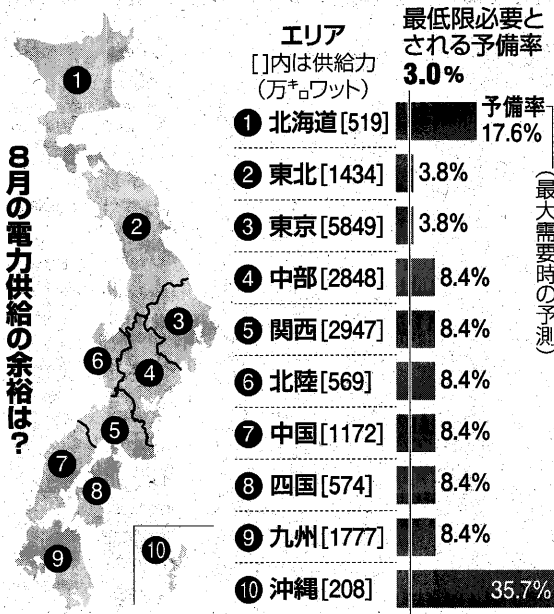
電力 猛暑でも安定

節電・再生エネが貢献

記録的な猛暑が続き冷房需要で電力使用量が増えている。8月も暑くなりそうだが、省エネの定着や再生可能エネルギーの普及が進んで、電気が足りなくなることはなさそうだ。政府は夏の節電要請を3年連続で見送っている。▼1面参照

埼玉県熊谷市で国内最高の41・1度を記録した7月23日。東京電力管内では5653万キロワットと今夏一番の電力需要を記録したが、供給余力(予備率)は7・7%で最低限必要な「3

8月の電力供給の余裕は？



「%」を上回った。予備率に余裕がある最大の理由は、東日本大震災後の「節電」だ。東電管内では、震災前に約6千万キロワットだった最大需要は500万キロワットほど減った。再生エネの普及も余力確保に貢献する。九州電力管内では今夏の最大需要を記録した7月26日、太陽光が27%を供給した。需給が逼迫した時に使用抑制などを依頼する「ネガワット取引」や、他電力からの電力融通などの対策も進む。今夏、最も逼迫したのは関西電力管内だ。関西は7月17、18の両日に各27万キロワット分のネガワット取引を初めて実施。18日は中部電力や北陸電力など5社から計100万キロワットの融通も受けた。今夏初の電力融通だった。

近年は夕方に需給が厳しくなる傾向がある。太陽光の普及で昼間の余裕が大きくなる一方、太陽が沈む時間帯に照明や炊事使用量が増えるためだ。経済産業

省は「再生エネが普及すると、最大需要でない時間帯に需給が逼迫する可能性がある」と話す。

ある。調整電源の確保を進めたい」と話す。

(桜井林太郎、関根慎一)